

古代から幕末までの歴史探訪・国宝「朝鮮鐘」拝見の旅へ!!

【行程】

小坂公民館=====南条SA^{トイレ}休憩=====氣比神宮=====金前寺・金崎宮=====みなとつ
るが山車会館・敦賀市立博物館=====＜昼食・ヨーロッパ軒＞=====武田耕雲斎等の
墓・松原神社=====（氣比の松原横通過）=====西福寺=====常宮神社
=====小牧かまぼこ=====尼御前SA^{トイレ}休憩=====小坂公民館

氣比神宮…北陸道の総鎮守であり、越前國一之宮

- (1) 氣比神宮大鳥居(国重文)…敦賀のシンボルである。創建は古く、弘仁元年(810年)に東側参道に建てられたが、正保2年(1645)に佐渡から奉納されたアスナロの太木で、小浜藩初代藩主酒井忠勝が現在地に再建した。明治34年には国宝に指定されていた。



春日大社・厳島神社と並ぶ日本三大木造大鳥居である。(高さ10.9m 柱間7.45m)⇒

- (2) 氣比神宮…太宝2年(702)の創建で、明治28年3月、神宮号宣下の御沙汰により氣比神宮と改めた。

◆本殿(主祭神)⇒伊奢沙別命(いざさわけのみこと) <氣比神宮の大鳥居>
第14代仲哀(ちゅうあい)天皇・神功(じんぐう)皇后

◆東殿宮⇒日本武尊 ◆総社宮⇒第15代応神天皇

◆平殿宮⇒玉姫命 ◆西殿宮⇒武内宿禰命(たけのうちのすくねのみこと)

- (3) 「つるが」の地名は、第10代崇神(すじん)天皇の時代に敦賀に来着した朝鮮半島の大加羅国(おおからこく)の王子、都怒我阿羅斯等(ツヌガアラシト)が額に角が生えていたため、この地を「角鹿」(ツヌガ)そして「敦賀」となった。都怒我阿羅斯等は「角鹿神社」に祀られ、敦賀駅前に銅像あり。



- (4) 神の言葉を伝えることのできる優秀な巫女として描かれている神功皇后は、急逝した夫の仲哀天皇に代わり朝鮮半島に出兵する際、ここ氣比神宮で戦勝を祈願し、見事に新羅・百濟・高句麗の三韓を征した女將軍として知られている。

- (5) 中鳥居前には、南北朝争乱時の延元元年(1336)に氣比神宮の大宮司が戦勝祈願して旗揚げしたとされる「旗揚げの松」がある。

氣比神宮ゆかりの人

(たあしんきょう)

- ◆他阿真教…鎌倉時代後期の時宗の僧・第2代遊行上人
正安3年(1301)、他阿が北陸巡錫(じゅんしゃく)のおり氣比神宮の参道がぬかるんでいるのをみて、浜から砂を運び、そこがのちに門前町の神楽通りとなった。

- ◆結城秀康…徳川家康の次男で越前福井藩祖



<遊行のお砂持>

- 織田信長と朝倉氏との抗争(1570年)によって灰塵に帰した本殿を、慶長19年(1614)に結城秀康が寄進した。本殿は第二次世界大戦前は国宝であった。

- ◆松尾芭蕉…江戸前期の俳人

元禄2年(1689)『おくのほそ道』の紀行で敦賀に到着した芭蕉は、氣比神宮に夜参り「月清し 遊行のもてる 砂の上」をはじめ15句を読んだ。

金ヶ崎城の戦い…南北朝の争乱「延元の乱」

- (1) 建武3年・延元元年(1336年)10月、足利尊氏の反乱により、都を追われた南朝軍は、新田義貞を大将として、後醍醐天皇の皇子・尊良(たかよし)親王と恒良(つねよし)親王らを伴い北陸へ逃れた。



- そして、出迎えた氣比神宮の大宮司・氣比氏治らと共に金ヶ崎に約半年間こもった。
- (2) 新田義貞は、援軍を求める為に嫡男の義顕(よしあき)を杣山城(そまやま)の瓜生(うりゅう)氏に派遣したが援軍を得る事ができず金ヶ崎城へと戻った。
- (3) 翌年2月16日、ようやく杣山城の瓜生氏が金ヶ崎城への援軍を決め、金ヶ崎城を包囲している北朝軍の足利高経軍(こうのもろやす)と戦ったが、敦賀市檜曲付近にて戦死し援軍に失敗した。
- (4) 援軍を得られなかった義貞軍は、兵糧も尽き、3月6日、足利軍方が城内に攻め込み、兵糧攻めによる飢餓と疲労で城兵は次々と討ち取られ、尊良親王(27歳)、新田義顕(18歳)、城兵300余名は城に火を放ち自害した。
- (5) 恒良親王(15歳)は、落城直前に小舟で脱出したが、やがて捕らえられ京都で毒殺されたと伝えられている。
- (6) 新田義貞は落城寸前に金ヶ崎城を脱して杣山城へと逃れ、その後、越前藤島で北朝方と戦い、燈明寺岬で戦死した。称念寺に墓がある。

金前寺(こんぜんじ)…高野山真言宗

- (1) 天平8年(736)、聖武天皇の勅願により泰澄大師自らが十一面観音坐像「袴懸の観音」(はかまかけ)を彫刻し開山したのが始まりとされ、氣比神宮の奥の院として寺運が隆盛であった。
- (2) 「延元の乱」では、ここの観音堂が尊良親王と恒良親王の行在所(あんざいしょ)となった。



- (3) 境内には、新田義貞が軍鐘をこの浜に沈めたという故事に因んで、松尾芭蕉が詠んだ句
「月いづこ 鐘は沈る うみのそこ」
を刻む鐘塚がある。



金崎宮・絹掛神社・朝倉神社・愛宕神社

- (1) 敦賀湾を一望する小高い山に「金ヶ崎城跡」があり、明治26年(1893)に敦賀町民有志により建立された。その後、類焼により焼失したが、明治39年(1906)に現在地で再建された。



- (2) 祭神は、
- ◆ 金崎宮……後醍醐天皇の皇子・尊良親王、恒良親王ら
 - ◆ 絹掛神社…新田義顕、氣比氏治、将兵、公卿ら
 - ◆ 朝倉神社…戦国時代の越前の守りの要として敦賀にあった朝倉氏6代と一子
 - ◆ 愛宕神社…火産霊大神(地方郷土の崇敬が篤く火防の神と崇められている)

◎元亀元年(1570)4月

- (1) 織田信長は、越前の朝倉義景討伐の軍をおこし、木下藤吉郎(のちの豊臣秀吉)・徳川家康らも越前へ向け進軍した。
- (2) 敦賀では、朝倉軍が手筒山城・金ヶ崎城を1,500人で固めたが、山の裏手は沼地(※1)となっていて攻めてこられないと油断していたところ、丹羽長秀らが攻めあがり、手筒山城を陥落、1,000人以上が討死した。
金ヶ崎城も包囲され、朝倉景恒(かげつね)は城を明け渡した。
- (3) 順調に軍事行動が続き、越前に攻め入ろうとした時信長の元に、お市(近江の小谷城主・浅井長政の妻で信長の妹)から、両端をひもで結んだ小豆袋が届き、暗に「袋のねずみ」となることを知らせた(逸話)。浅井長政の裏切りである。
- (4) 北近江から攻め上られた場合、越前より朝倉本隊が到着すれば信長軍は挟み撃ちにあうこととなり、極めて危険な状態となる。それゆえ早急な撤退が必要とされ、金ヶ崎城などを攻略しつつも実質的な敗北として織田全軍が陣を引き払った。これを「金ヶ崎崩れ」とも呼んでいる。
- (5) この時、殿(しんがり)を努めた木下藤吉郎と藤吉郎を助けた徳川家康の活躍で無事帰京できた。
- (6) 信長は、2か月後「姉川の合戦」で浅井・朝倉連合軍を破ったが、信長・秀吉・家康は金ヶ崎城をめぐる出来事が天下取りへの転換点となった。
- (7) 浅井長政の小谷城主は、1573年9月羽柴秀吉の軍勢により落城(長政自刃)

(※1)現在の中池見湿地(なかいけみしっち)

手筒山・御山(深山)・中山の3つの低山に囲まれた小規模な山間盆地であり、約3,000種の動植物が生息している。面積約25haで、地殻変動によって約40mにもおよぶ泥炭層(でいたんそう)があり、各層に含まれる花粉や実などから当時の植生が推測される貴重な湿地帯である。ラムネール条約湿地に登録されている。



友情に殉じた武将 大谷吉継

- (1) 大谷吉継といえば、豊臣秀吉に仕えた武将で、白い頭巾を被った石田三成のたった一人の友でもあった。
- (2) 天正17年(1589)、越前国敦賀5万7千石を拝領し敦賀城主となる。(敦賀城跡は、西小学校付近一帯)

- (3) 吉継は、最初は天下の情勢を見極めて徳川家康に接近した。しかし、吉継が家康に従い上杉討伐へ向かう途中、石田三成の居城である佐和山城に立ち寄った。そこで親友の三成から家康に対しての挙兵を持ちかけられる。
- (4) 「勝機なし」と吉継は何度も説得したが、結局決意が固い三成を説得できず敗戦を予測しながらも息子達と共に三成の西軍に参戦した。
- (5) 失明した吉継は輿に乗って関ヶ原の戦いを指揮し奮戦する。しかし、小早川秀秋らの寝返りで敗戦となり、関ヶ原の戦いで唯一切腹した武将として戦場に散った。義に厚い人物ということで広く知られている。

-

禁門の変



- (10) 同年12月11日⇒約40日かけて中山

にしんの腐敗臭と便桶の異臭、寒さで20名以上が病死する。

- *死罪…353名(5回に分けて、武田耕雲斎らは
斬首された。耕雲斎享年63歳)

*遠島…157名(小浜藩預かりとなり、明治元年許され准藩士に)

*追放…187名(天狗党に従って集まった諸国の人夫たちで、国元へ帰る)

*水戸藩渡し…130名(水戸藩の百姓)

*永厳寺(ようごんじ)預け…11名(15歳以下の少年で、後に水戸へ帰藩した)



※天狗党員353名が埋葬された「武田耕雲斎等墓」は国の史跡に指定されている

- (1) 大宝3年(703)の創建と伝えられ、神功皇后が、ここで皇子の応神天皇を安産したことから、安産の神様として崇められ、地元では「お産の神宮さん」と呼ばれ親しまれている。



- (2) 神功皇后は、氣比神宮の祭神・仲哀天皇の妻であるため、常宮神社は氣比神宮と夫婦とされ、常宮神社は奥宮とされている。



- (3) 毎年7月には、氣比神宮の祭神・仲哀天皇を納めた船神輿が船で海を渡り、神功皇后を祭る常宮神社まで会いに行くというロマンチックな神事が執り行われている。

- (4) 立地条件や神功皇后が三韓征伐に際して海路の無事を祈願したとの伝えがあることから、航海や漁業の守護神としても信仰されている。

国宝『朝鮮鍾』

- (1) 朝鮮鍾(ちょうせんしょう)は、朝鮮半島で主に統一新羅時代から高麗時代に鑄造された銅製の鐘の総称である。
- (2) この鐘は、太和7年(天長10年(833)平安時代前期)に製造された鐘で、新羅時代の鐘の遺品は少なく、日本に5例、韓国でも6例が現存しているにすぎない。

この鐘は日本に伝わっているものとしては一番古く、昭和27年に唯一『国宝』に指定されている。

- (3) 朝鮮鍾は、和鐘(わしょう=日本の梵鐘)に比べ、二つの大きな特長がある。一つは鐘の文様で、和鐘のように袈裟襷(けさだすき)の文様ではなく、天空をかける天女の姿2体の浮彫りは美しい。

もう一つは、竜頭(りゅうず=鐘の吊り手)の横に甬(よう)または旗指しと呼ばれる筒状の突起がついている。

- (4) 社伝によると、この鐘は敦賀領主であった大谷吉継が朝鮮の役において持ち帰り、豊臣秀吉の命により慶長二年(1597)常宮神社に奉納されたと伝わっている。



氣比の松原(国名勝)…日本三大松原

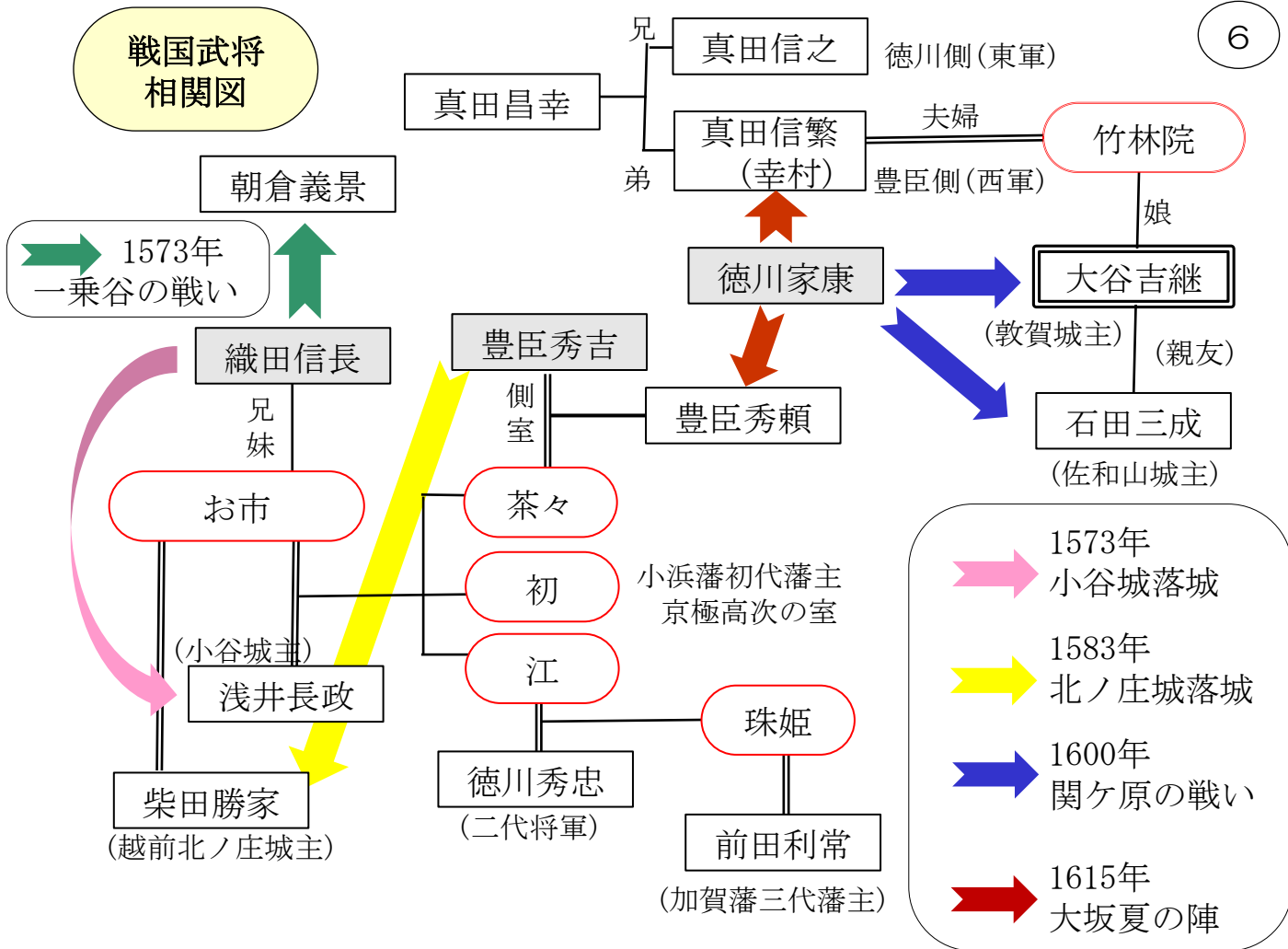
- (1) 敦賀湾の奥に面する部分のうち西側半分を占め、長さ約1.5km、広さ約40万㎡の広さである。
- (2) 白砂青松(はくしゃせいしょう)のコントラストが印象的で、アカマツ・クロマツ・フランプ海岸マツなど約17,000本が生い茂っている。



そのうち、アカマツが85%を占めている。

- (3) 9世紀には、松原客館や松原駅が置かれ、渤海からの使節団が利用し大陸との貿易が盛んになり、10世紀には日宋貿易の拠点の一つにもなった。

※三保の松原(静岡市)、虹の松原(佐賀県唐津市)と並んで日本三大松原

戦国武将
相関図

杉原千畝(ちうね)…人道の港・敦賀ムゼウム

1920年代にロシア革命の動乱で家族を失ったポーランド孤児や、第二次世界大戦中ナチスの迫害によりポーランドなど欧州各地からリトアニアに逃れてきた難民たちに対し、リトアニアの日本領事館に赴任していた杉原千畝は、昭和15年7月から8月にかけて外務省からの訓令に反して大量のビザ(通過査証)を発給した。そして、およそ6,000人にのぼる避難民たちが日本に上陸した唯一の港が敦賀港で「人道の港」と称された。



西福寺…「越の秀嶺」(徳川御三家・御三卿と越前・会津の方が御住職となった寺のこと)



- (1) 北朝応安元年(1368年)、後光厳天皇の勅願により良如上人が開いた浄土宗鎮西派の寺院である。
- (2) 御影堂・阿弥陀堂・書院などの主要建物が国の重要文化財に指定されている。
- (3) 1400坪の書院庭園(書院は結城秀康の寄進)は江戸中期の作で、極楽浄土を地上に表現したともいわれ、国の名勝に指定されている。また、鬱金(うこん)桜は松平忠直の御手植である。特に、朝日に映える新緑・紅葉はまるで別世界である。
- (4) 時の朝廷や室町幕府の崇敬篤く、近世には越前松平家と深く関係し、北国浄土宗の中心寺院として「越の秀嶺」(こしのしゅうれい)の別称の格式を持っている